

文献センター通信・リベーロ

第1号

1995年2月15日発行
定価／300円
(年4回発行)

本号の内容

- 3 2 文献センターが活動を再開
文献センターの情報センターへの変身
連合論ノート
二冊の本
計報 高島洋氏

リベーロを復活します

富士宮の文献センターの活動が再開しました。この活動再開に伴い、「文献センター通信・リベーロ」を発行することになりました。

リベーロという名前を覚えている方もいらっしゃると思います。東京・横浜で編集・発行されていたリベーロは、

八八年一二月を最後に発行を休止しました。リベーロとしては6年を経ての再刊になります。

リベーロの歴史について少し確認しておきましょう。そもそもは、日本アナキズム研究センターのニュースとして発行されました。発行者は京都のリベーロ社でした。東京

地区に編集が移るのは、七八年五月、四六号からです。その間、リベーロの名前では英文リベーロ、夏のセミナー特集号などが発行されました。

文献センター通信・リベーロ発行に向けて

リベーロ編集部

地区に編集が移るのは、七八年五月、四六号からです。その間、リベーロの名前では英文リベーロ、夏のセミナー特集号などが発行されました。

世界史などはあまり扱わず、身近な無関係に作られたからです。

八八年一二月を最後に発行を休止しました。リベーロとしては6年を経ての再刊になります。

リベーロはもともと国際経済や

なことが起こっています。八九年の天皇の病気・死亡による自衛隊運動、ソビエト連邦の崩壊、東欧の共産党の崩壊、バブル経済の破綻など思い出す有名な事件だけでも多く起きました。

リベーロはこれまで、ひどくわれわれ編集部にかかります。また、読者になられるであろう皆様の熱き期待にかかるいます。ぜひとも衰退してしまうことは、ひとえにわれわれ編集部にかかります。

リベーロとして再出発します。パワーが持続するか、それとも衰退します。

な問題・運動などを取り上げていたので、関係ないと言えば関係ないのですが、そうは言つてもこの激動の時に休んだのには何か訳でもあるのかとかんぐられてもおかしくありません。実は……。一言で言つてしまえば、パワーの衰えです。継続する熱意が急速に冷めていったのが最大の原因だと自覚しています。

ご協力お願いします

では、なぜ今リベーロを始めることがありますと、文献センター再開の熱に当たられたからです。再度、情報の収集・発信と、新しい関係の構築に進んでみようという気になったのです。

リベーロは文献センター通信・リベーロとして再出発します。パワーが持続するか、それとも衰退してしまうことは、ひとえにわれわれ編集部にかかります。

読者になられるであろう皆様の熱き期待にかかるいます。ぜひとも温かいご支援・ご指導をお願いします。

リベーロはこれまで、ひどくわれわれ編集部にかかります。

世界史などはあまり扱わず、身近な無関係に作られたからです。

リベーロはもともと国際経済や

なことが起こっています。八九年の天皇の病気・死亡による自衛隊運動、ソビエト連邦の崩壊、東欧の共産党の崩壊、バブル経済の破綻など思い出す有名な事件だけでも多く起きました。

リベーロはこれまで、ひどくわれわれ編集部にかかります。

リベーロとして再出発します。パワーが持続するか、それとも衰退します。

では、なぜ今リベーロを始めることがありますと、文献センター再開の熱に当たられたからです。再度、情報の収集・発信と、新しい関係の構築に進んでみようという気になったのです。

リベーロは文献センター通信・リベーロとして再出発します。パワーが持続するか、それとも衰退してしまうことは、ひとえにわれわれ編集部にかかります。

読者になられるであろう皆様の熱き期待にかかるいます。ぜひとも温かいご支援・ご指導をお願いします。

リベーロはこれまで、ひどくわれわれ編集部にかかります。

世界史などはあまり扱わず、身近な無関係に作られたからです。

リベーロはもともと国際経済や

活動計画と 会員募集のお知らせ

一九七〇年に設立の後、この十

年余り活動を休止してきた富士宮の文献センターが活動を再開した。昨年十月以後、数次の準備会合を重ね、十二月に次のような活動計画がまとめられた。呼びかけ人は、

龍武一郎、奥沢邦成、中久保邦夫、羽熊直行の各氏。

■センターの運営

一 運営および活動計画を立案し、センターの公開を図るとともに、支援・協力を要請する。

二 センターの維持・運営は会員制とし、年間会費（一口）五千円とする。

三 会計は新会計年度としてスタートし、これまでの活動経過および報告は別途作成する。

四 センターは会員に対して利用の便宜を図り、「通信」を発行して活動状況の報告・連絡・会員

問のコミュニケーションを図る。

五 管理・運営は、会員の合意のもとに、龍武一郎、奥沢邦成が責任を負うものとする。

六 センターの広範かつ長期的な活動のために相談役を踏襲し、活動全般に対応して助言を受ける。

相談役は向井孝氏にお願いする。

■当面の計画

今できるところから、できる範囲で、できる人が手をつけていく——ことをモットーにして、とりあえず、第一次の三ヶ年計画をもって、センターの活動を再開する。

センターの活動は次のようにイメージされている。

一 新築されたセンターの書庫で重要な文献が公開され、センターに行けば手にとつて見られる。

二 コピー機があつて、必要な

ものは複写できる。

三 文献データのデータベース化が開始され、パソコンで自由に検索ができる。

■書庫建設

書庫（八坪）を建築する（予算二五〇万円）。九五年度中の完成を目指し、当面の資金は借入金によって賄う。

〔建築予定〕
一九九五年三月下旬：建設開始

〔ワーキャンプ〕
九月中～下旬：交流会〔ワーキャンプ〕

〔資金計画〕

建設資金は会費を充当する。九五～九六年は同資金カンパを含む会費（一口一千万円）を呼びかける。建設資金は、一時借入、以後三年にわたって完済する。

■研究活動

前項（b）の項目別目録の作成——それぞれ関心のあるテーマについて、個人が目録を作成し、センターはその情報提供を受け、会員に公開する。

また、センターの研究テーマ、例えば「渡辺政太郎」といったテーマを設定し、彼に関する資料収集を呼びかけ、交流を図り、資料を集めること。

■資料収集

積極的に収集を進める。前項に

公開する。つまり、内容に即して適宜、構成・再構成していく。

二 データベース化

a センター蔵書資料をパソコンデータでまとめる。

よるデータ整理にもとづき、優先順位をつけつつ収集する。

■長期的な基本計画の作成

永続的なセンターの運営を図るために法人格の組織化を検討する。財団もしくは協同組合化といった方向が考えられる。

一 会員募集: 年会費五千円

(書庫建設資金カンパを含め、九

五〇九年六年度はできれば二口)

二 項目別目録作成への参加お

よび情報提供: 次号で報告。

「カンパ振込先」
郵便振替口座

00850-3-30010

A 文献センター

静岡県富士宮市杉田二五
〔連絡先〕

龍 武一郎

10544(27) 4314

(東京: 新宿区本塩町8番地
エーデルホーフ内 奥沢邦成)

合がもたれました。当日は、呼びかけに応えた東京・広島の参加者によって提案に沿う基本的な賛意が表明されました。

以上の経過と今後の方向については「お知らせ」を参考にしてもらうとして、ここでは、多少ともセンターを知る人たちのために、活動再開に際して考えたこと、また何がどう変わろうとしているのかを知つてもらうために、この間の事情を報告しておきます。

・反省すること

現時点を考えると、一つの反省として、文献資料類の整理に「日本図書分類」方式を採用したこと、が、公開へ向けての可能性を狭めたのではないかということがあります。センターには、単行本、雑誌、それとミニコミ類の資料が集められています。単行本は、日本図書分類に従つてカードが作成され、蔵書目録にまとめられました。ミニコミ類については、整理作業がなかなか進展しませんでした。

ふり返ると、八〇年五月に所蔵文献目録の第四集・邦文單行書を編集したのが最後の活動でした。これは力尽きたことを象徴するかのように、印刷直前の版下のまま、

る・・という作業の繰り返しが続きました。

こうした作業の繰り返しと書庫の狭いスペースといった条件もあって、情報公開に向けた活動は進展せず、活動そのものの展望を持ってぬままに、袋小路に陥つたのではないかと反省しています。

その最大のネックは、寄贈された文献類は整理し終えてから公開するという考えに、知らぬうちに染まつていたように思います。その頭からすると、あまりにもハンドルが多くて、見通しをもつてクリアできるとはとても考えられないかったです。少なくとも平均点以上の整理をしてから(公開)という考えのもとにあつた「日本

● 九五年春のワークキャンプ
書庫建設予定地に現在建つてあるプレハブの解体作業を主目的に、三月一八日(土)～二一日(祝)の期間、富士宮でワーク・キャンプを開催します。参加ください。
〔申込み〕
10544(27) 4314

静岡県富士宮市杉田二五一まで
龍武一郎
から書庫新築と活動再開の提案があり、十月九～十日に富士宮で会

・はじめに

一九七〇年に設立された富士宮の文献センターが、十年余りの休止期間に終止符を打つて、活動を再開しました。

ふり返ると、八〇年五月に所蔵文献目録の第四集・邦文單行書を編集したのが最後の活動でした。これは力尽きたことを象徴するかのように、印刷直前の版下のまま、

文献センターの 情報センターへの変身

現時点を考えると、一つの反省として、文献資料類の整理に「日本図書分類」方式を採用したこと、が、公開へ向けての可能性を狭めたのではないかということがあります。センターには、単行本、雑誌、それとミニコミ類の資料が集められています。単行本は、日本図書分類に従つてカードが作成され、蔵書目録にまとめられました。ミニコミ類については、整理作業

がなかなか進展しませんでした。

ふり返ると、八〇年五月に所蔵文献目録の第四集・邦文單行書を編集したのが最後の活動でした。これは力尽きたことを象徴するかのように、印刷直前の版下のまま、

る・・という作業の繰り返しが続きました。

こうした作業の繰り返しと書庫の狭いスペースといった条件もあって、情報公開に向けた活動は進展せず、活動そのものの展望を持ってぬままに、袋小路に陥つたのではないかと反省しています。

その最大のネックは、寄贈された文献類は整理し終えてから公開するという考えに、知らぬうちに染まつていたように思います。その頭からすると、あまりにもハンドルが多くて、見通しをもつてクリアできるとはとても考えられないかったです。少なくとも平均点以上の整理をしてから(公開)という考えのもとにあつた「日本

「図書分類」の採用は、いわばその象徴です（もちろん、この分類が不要であるというわけではありません）。目録作成には利用しましたし、いずれ全体が整理されれば不可欠なことです。ただ過渡的には、力に不相応な水準を目指してしまったということでしょうか）。

そこで、「センター独自の項目立て（関心の高いテーマに即して分類）で、できる範囲のものから公開していく」という方針で、整理、整理に追われていた状況から一步踏み出すことになりました。力まず、できるところから歩を進めていこうという、センターの活動原則に立ち返りました。

固定概念に囚われている時、人間の発想や思考がいかに貧困なままに陥っているかを、身をもって体験した次第です。その意味で、この二ヶ月余りのセンターの活動再開に向けた取り組みは、貴重な経験ともなりました。

もう一つの反省点は、センターの原点をいつの間にか見失ったことでしょう。その結果として、日常的整理に埋没してしまったともいえます。センターはもともと文献資料を介したオープンスペース

を構想していたはずでした。しかし、気づかないうちにその空間を、資料入りダンボールでおおつてしまつたといえます。「これはレトリックではなく、少なくとも私にとっては、実感なのです。

・知的好奇心』

センターの原点

・初心にあつたもの

活動再開の打合せで日々に会つた人の中で「でも、結局は研究者が使うのでしょうか……」という声がありました。私はあえて異を唱えませんでした。このような言葉は、かつてセンターが頻繁に頂戴したものでした。でもあえて付言するならば、センターの発端、その原動力はアナキズムに対する知的好奇心です。いつの世にも常に変わることのない、新しい世代の旺盛で何ものを乗り越えていくこうとする知的関心です。かつてのセンター設立メンバーの人々にとっても、今の若い世代にとっても、その心情には寸毫の違ひもないはずです。

同時に、その知的欲求を満たしうる教典が、センターに限らず、どこにも存在しないことも事実です。三蔵法師の如くに、あらゆる

困難辛苦を克服して教典を手にする史実があります。つまり、教典は寓意であつて、そこに至る過程が実体だと思いますが、それになぞらえるなら、センターは永遠に出発の地だと思います。また、そうなればいいと願います。

があつたといえます。

センターが「CIRANIP」を名乗つたのは、海外とのコミュニケーションを図ろうという目的からでした。外国のグループや運動を、得られた刊行物を翻訳して紹介しようという意図があったわけです。『英文リベーロ』によつて、一時は拡大した海外とのパイプも、現在はほとんどありません。それらを活用する力が育たなかつたからです。しかし、現在なお、そうした取り組みがいくつかのグループで行われています。つまり、こうした知的な欲求は少しも変わらないわけです。

先日、富士宮へ寄つた折に、出迎えてくれた龍さんが会うなり、「あんな官僚にやり込められて……」と怒っていました。話を聞くと、「朝までテレビ」で、〈行政改革〉をテーマに、主要官庁からの出席を得て討論が行われたとのことです。「大蔵省の奴がニヤニヤしながら、ああ言えばこう言う」という具合で、質問や疑問がみんな封じ込められてしまう。誰も有力に反論できない……おかげで明け方まで見てしまつたそう

その有効な反論のためのデータ
というのも、センターがスタート
当初に目標としていたものでした。
高望みだといえはそれまでですが、
これも初心の一部です。官僚は、
生活費と権力と予算を得て、情報を
手にして（しかも隠して）いる。

連合論ノート

森野栄一

かつて『アナキズム』誌が刊行されていた時期、編集にタッチしていた人間を中心に研究会をもつていた。研究会のたびにレジュメがだされたが、これをそのままにしておいて仕方がない。何らかの形で公表しておけば、問題意識を引き継いでくれるひとがいるかもしれない、との話が出た。もう半分消えかかったかなり以前の書きのレジュメや今のコピー用紙とは違って漫式の重たい紙に書かれたそれを整理していく、たいした内容でもないが、そもそもそんな、と思い、公表することにした。

状況の推移のなかで各人の問題意識も変わったが、今までいろいろな課題に手をつけていたな、との感が強い。しかし人生の持つ時間を考えればこれから取り組める課題も自ずから決まつてくる。だからといって、脇におかれた数々の諸課題が意味がないものかといえば、そうでもない。いつの日かだれかが興味をもつてくれるかもしれない、とのかすかな期待ももちたいのだ。幸いに、センターの再開に向けた動きが始まっている。その情報整理の一環にいれたらとおもう。

私たち、ではどのように対抗していくのか。生活費を削つて、意志と面白がりの精神を持つて対峙するしかない——と思います。（オク）

第1回 アナルコ・フェデラリズム、問題の整理のために

はじめに

連合主義は我々の思考の一部をなす重要な思想と考えられ、言及されることが多いが、私にはいまにいたるも不明な点が多くある。

つまり、連合主義とアナキズムはいかなる関連に立つており、またそこでの連合主義はいかなる内容、性格のものとして捉えられるべきか、これらが不明なのである。そこで若干、問題への視角を確立するため問題の整理をしてみよう。

ふつう連合主義という場合、理論的にはおそらくカントにまで遡れるように思われるが、この言葉からひとによつては、アメリカ（独立）革命における思想家たち、すなわちハミルトン、マジソン、ジェイを想起するであろうし、我々であれば、ブルードンに始まりバクニンが継承していく流れを思

い浮かべるように、ひとが念頭におくものは様々である。源流を尋ねればまだほかにもあるかもしれないほどだ。このように連合主義から想定される理論家が異なることはそれ 자체、問題の複雑性を示している。もちろん、連合主義とは、異なる民族間の関係に解決を与える社会的、ないし政治的形態、定式そして方法であると抽象的にいってしまえば、多様な連合主義の内容を一切合切包括しうるかもしれないが、それを確認するだけではなんの意味もない。そこで、まず身近なアナキズムとの関連をとりあげ、両者に共通するものはなにか、を問題にしてみよう。連合主義はふつう、社会的な各水準の、それぞれに独自な文化をもつ諸集団の、固有領域におけるそれぞれの統治の自律性の保証が存在するような統治あるいは政府を意味している。これは一見すると政治権力の否定としてのアナキズムと対立しているように見える。つまり政府（支配）の存在しない社会に関する理論であるアナキズムは連合主義の観念の否定を含んでいるのではないか、といふ疑問である。これに対しては、

アナキズムが社会に外的な（したがつて社会から疎外された）統治主体を上部受胎する社会を転倒し、自己統治に基づく社会を展望するものであることを確認すれば、外見上の対立性は退けることがで、どにとつて、連合主義は、自己統治に基づいた社会を具体的に展望するさいに重要な建設的要素であつたといつてよい。

ブルードンを例にとるなら、たしか「連合の原理」のなかであつたが、「わたしがアナルシーによつて開始した、政府万能主義的觀念の批判の結語は」、「ヨーロッパの民法の必然的基礎であり、あらゆる諸国家の組織化の必然的基礎である連合」でなければならないと明言している。かれがアナルシーが組織されなければならないときの連合主義の原理が役立ち得ると考えていたのは疑問の余地はないであろう。実際、かれの政治、経済的領域においては、1、工場が社会の構成単位でなければならない、2、それに参加する自主管理の諸形態を生み出さねばならない、2、それに参加する方

人の、共通で、不可分の所有、3、
参加による賃金の廃止、4、農・
工連合の創造などを、また、政治
的領域においては、コミニーン
(自治区)とレジオン(地区)の
連合をである。

これはほんどのアナキストに
共通といってよいかもしない。
たとえば、バクーニンは「労働者
協同組合、工業、農業、商業、技
術の諸協同組合によってそれぞれ
の紐帶のなかで連合的に組織され
た社会主義的コミューン(自治区)」
を考えているし、またこの組織化
の原則は、周知のように、1、下
から上へ、2、コミューンから諸
国民の中央へ、国家へ、3、連合
の方法で、ということであつたか
らである。

ところで、ブルードンやバクー
ニンの時代、またマルクスの時代
といつてもよいが、この時代には、
純粹に政治的な二つの連合主義が
存在していた。それはカントが
『恒久平和のために』のなかで、
なによりも新しい国際秩序を創造
するために表明した考え方である
し、また、新大陸におけるフィラ
デルフィア宣言(1787年)に
表明されている連合主義の思想で

2冊の本

奥沢邦成

■ 小笠原秀美のこと
小笠原秀美の名は、『民主解放宣言』の著者としてのみ頭に刻まれていた。

に、今度は大正十五年（一九二六年）に刊行された『体認の系統・序説』の第二版（一九三〇年）に出会った。時間つぶしに入つた黒の間口一間ほどの小さな古本屋の本棚、ほこりをかぶつた最上段にその一冊は置かれていた。書名は知らないがつたが、著者の名前が目にとまつた。

八木康敏『小笠原秀実・登』は
ようやく最近になつて面白く読む
機会を得たが、前著はいさか重
くて歯が立ちそうにない。そのま
まセンターに寄贈することにした。

「そうだ」という。
その後に、リブロポートの民間日本学者シリーズの一冊として評伝が出たということを耳にして、早速買い求めた。多分刊行後間もない頃である。同シリーズには、大沢正道著『石川三四郎』、折原脩三著『辻まこと・父親辻潤』などが入っている。

■植村さんの詩集
似たようなことは、次々と起るもので、古書市で焼けた茶色の1冊に植村諦の名前があつたので求めた本があつた。詩集『愛と憎しみの中で』（一九四七年、組合書店）である。

ンター向けに整理していたら、後見返しに「一九四七年一二月三日、諦さんより贈られる」とありました。目録カードを作ろうとしていたので奥付の方から見て、いたので気づいたのですが、「誰の本だったのかな」と思つて前へくつっていくと、前の見返し部分に、

愛と憎しみを以て
表現せねばならぬような時代に
われわれはいる

諦

清水清様

とあつた。

これで贈り主と贈られ主は判明した。いずれの人も直接・間接に少しは知つている人たちである。著者は序文で、刊行をすすめた同志・矢橋丈吉への謝意に触れてゐるが、考えてみると発行所の組合書店は、石川三四郎の『社会美学としての無政府主義』『無政府主義研究』などの小冊子の発行先でもある。発行者は矢橋丈吉、この人について私は何も知らないのであるが、四八年の歳月を経てめぐり合つた冊に不思議な気持である。

■ 訃報 高島洋氏

病氣療養中の高島洋さんが一月二三日、肝臓ガンのために亡くなつた。ご冥福をお祈りします。

高島さんは、大正五年十一月十七日、神戸市東灘区田中町一六九に生まれ、昭和二十四年一月日新製鋼尼崎工場に入社し、同四六年十一月に同社を定年退職。その間、日新製鋼尼崎労組副組合長、鉄鋼労連本部中執等を経験する。

アナキストにして詩人。詩歴としては、昭和二二年神戸クラルテ同人、同二四年姫路イオム同人、同三年東京コスマス同人。著書は、昭和四七年八月発行の『高島洋詩集』、同六二年『描れる煙突』がある。

この略歴は、詩集の奥付から引出された。運動歴については、他日を期したい。

高島さんの人となりは、通知に付せられた向井さんの一文を再録させていただく。

★『高島洋詩集』(七二年八月刊)

をとり出してみていたら、故秋山清さんが「詩集のあとに」の文章で、「……高島は、現在唯一といつていいプロレタリア詩人である。

……プロレタリア詩の直流として高島のあることを私の知る限りの人々につたえたい……。向井孝が『彼の前に出ると、だんだん自分がはずかしくなる』といったの

は、そのように真摯に生き方を体制への不協和に依り、たゆまない詩をかきつづけている畏敬の告白というべきであろう。……私は自分が

ともに閲覧できます。ただし、都合により応じられない場合もありますので、事前にご照会ください。

四 原稿、書簡、ノート等は非公開とされております。

五 資料目録は刊行しております。

六 閲覧の希望期日他)不明な点は、当館(0495-3746)までお問い合わせください。

一 書籍等の貸出は行っておりません。

二 書籍等の一部については、展示ケースにより、常設展示を行っております。

三 書籍については、支障のない限り、職員の立会及び指示の

ところである。

目録はなんとか作つてほしい

長のそれぞれにある詩の友人を幾人かもつてゐるが、高島洋の如き詩を今日以後に書く人は他の他にはいない。生活がある。だから詩がある。働く男だ。だからプロレタリア詩をかいてきた。一言につくせば、これが高島洋である。：

になんやかんや、苦労をこつそり
引受け、ようやつたナア。ごく
ろうさん。嗚呼」といおう。

(向井孝)

編集後記

◎…久しぶりのリベーロで緊張しています。その上、少し疲れました。あれから六歳を重ねたのです。疲れるのも当然か。

パワーと書きましたが、今度のリベーロでは力を抜こうかと思っています。熱い心は大切に、でも、

原稿を募集します

文献センター通信・リベーロ
は読者からの原稿を募集します。
地域・職場・学校での運動の報
告・集会の告知などナマの情報。
最近または昔読んだ本の書評・
感想、映画や音楽・絵画などの
感想、その他。もちろん、最近
の研究の成果、論文なども大歓
迎です。

長文に関しては、分載して
いたことがあります。でき
るだけ、2ページ以内に収まる
ようにしてください。ちなみに
リベーロページは約千八百字

重すぎる使命感で潰されないよう
に。編集が楽しくなるような紙面
を作りたいと思います。そうすれば、読みたくなる紙面も出来上が
るはず。

今号はまだ編集作業にも慣れて
いませんので読みにくいところも
あるでしょう。もう少し経てば何
とかなりそう? (S)

◎…真面目な話や議論が大の苦手
で、そんな内容は「三分間ともた
ない」と自他ともに認めていた
のが、かつての東京のリベーロ編
集部であった。

です。タイトル分をとると四百
字詰め原稿用紙で四枚くらいで
す。原稿は手書きの場合には当方
で入力しますが、できれば電子
媒体にて送っていただければ幸
いです。ワープロ使用の場合は
テキストファイルにして、フロッ
ピーディスクまたは電子メール
で送ってください。

【送り先】

(郵送の場合) 連絡先=奥沢まで
(電子メールの場合) FFC00170 (Nifty-Server) また
はT-SATOU(A-NET)の佐藤徹まで

ただ、ぼくの記憶するところでは、リベーロ紙を東京で引き受け
ようと言ったとき、高円寺の北口にあった喫茶店の大きな木製

の卓を囲んでいたメンバーの顔は
マジで、しかも時間は長かった。

多分、その時に全てを出しきつてしまつたので、その後は三分と
もたなくなつたのではないか?
その時に比べると、いささか生
彩を欠いた中年トリオが「では、
やつてみますか」と、少し心も
とないスタートではあるが、本家
センターの方の夢は大きく広がつ

ている。できれば、センターをは
ずした情報紙に育てていきた
(オク)

◎…六年、もう、そんなに経つの?
リベーロ再開と聞いて月日の流
れの早さを感じている。ベルリン
の壁崩壊で浮かれたつ障壁を横目
に見ながら、そうではない……と
ブツブツ言いつつ、よつて立つ基
盤を探さなければと思いつつ、す
でに六年。アンチではなく全面に
押し出せるものを、いつかは見つ
けたいものだ。(イ)

●お知らせ

【定期購読者だった方へ】

休刊によつて生じた残号分につきましては、新リベーロを4号分送することにより、清算させて頂きます。4号にてあらためて継続の意思の有無を確認させて頂きます。

【会員の方へ】

文献センターの会員の方には
会報として送付します。購読料
は会費に含まれています。

リベーロ編集部

文献センター通信・リベーロ
一九九五年二月一五日発行
第1号

発行所/文献センター
編集/リベーロ編集部

連絡先/東京都新宿区本塩町8

エーテルホーフ内
定価/三百円(送料込)

年間定期購読料(年四回発行)/
千二百円(送料込)

編集を手伝つてくださいの方は、
名乗り出してください。皆さん
の助けが必要です。